

第 17 号(2009.10.28 配信)

今回と次回、2 回に分けて、アメリカのオバマ大統領初来日にも関連し、いろいろな角度から「オバマのアメリカ」を考えてみたいと思います。「大統領」を省略して「さん」付けや敬称略になりますが、それを初めにお断りしておきます。

オバマさんの話は、昨年末の「サロン便り・第7号」で詳しく書きました。「同・第11号」(4月配信)の「昭和の話・前編」では、4月5日プラハでの「核のない世界をめざす」画期的な演説に触れ、いずれ、オバマ政権の現況や見方を記すお約束をしました。

それを、来る11月12,13両日に予定されている初来日を契機にと思っていたのですが、突然降ってわいたように「ノーベル平和賞」のニュースが飛び出し、今1回だけでは済まなくなりました。オバマがアメリカ国内で直面している諸問題を取り上げる予定をむしろ次回に回して、取りあえず今回は、最近の話題になった「平和賞」の話をしましょう。

知っているようで実は正確な把握や理解が足りないために「あ、そうだったか」と思う事柄は、私たちが日頃よく経験します。「ノーベル平和賞」もあらまは分かっている、あれこれ尋ねられると確答しがたい事柄の一つ。皆さんと一緒に、きちんと話ができるよう、「オバマのアメリカ」を記す前に、正しく知っておこうと考えてのことです。

今月9日の夕方でした。たまたまテレビでニュースを聞いていたら、臨時ニュースのテロップが画面に。「オバマ大統領にノーベル平和賞決定」と。トップレベルの「時の人」ですから臨時ニュース扱いは当然としても、とっさに、「えっ？」と本心驚きました。「就任してまだ1年にもならないのに?」。そして「もう1,2年実績を見てからでよいのではないか」が、私の率直な実感でした。

さっそく都心では号外が出たようです。その夜のニュースで聴いた「街の声」は、私の驚きや実感とほぼ同様の反響でした。内外著名人の感想や意見も種々報道されました。賞賛や祝意が多い中で、慎重論や疑問視もありました。翌10日の新聞各紙に相当分量載っていましたから、それらの集約は、ごく一部(後述)を除き、ここでは省略します。

それよりも「ノーベル平和賞」そのものを考えてみたいと思います。

昨年、益川さんや小林さんたち日本の科学者3人が受賞した物理学賞、化学賞、あるいは文学や経済学など通常のノーベル賞は、それぞれの分野での学問・研究等の積年の成果、実績が対象とされます。「平和賞」はそれらとは選考方法が違います。ノルウェー議会が任命する5人の選考委員会が、何千人もの各国有識者(氏名など公表されない)に手紙を出し、推薦を受けた個人や団体について専門家の助言を受けて検討するそうです。授賞式もスウェーデンのストックホルムではなく、選考委員会がおスロで授与すること。1901年に始まり、人権や国際紛争の解決・調停への貢献、平和維持・軍縮の分野での活動等が対象といわれます。一国のトップ政治家が受賞する例には、演説、発言などが実績につながるかどうかを見越して、特有な政治的考慮を感じ取ることがあります。

40年近く前の話で忘れかけていましたが、1971年に当時西ドイツのブラント首相が選ばれたのは、東方政策や東西冷戦の打開を唱えたからでした。衆目の実績があったとはいいがたく、実際の冷戦終結はずっと後年でした。2年後の73年には、佐藤栄作元首相が選ばれました。7年を超える在任最長記録の首相で「ご苦労様賞」だと皮肉な評さえありました。世界から注目される「平和貢献」があったかとなると、どうだったか? 太平洋戦争の結果、アメリカが軍政下管理してきた沖縄の日本への返還条約調印しか思い浮かびません。マスメディアから「官僚政治」「対米依存」の

批判さえあった方です。

オバマ受賞に話を戻しましょう。ノルウェーの選考委員会は「核兵器のない世界というビジョンと働きに特別な重要性を認めた」と指摘し、「国際政治に新しい環境をもたらし、国連やその他の国際機関が果たし得る役割が強調され」、対話と交渉こそが、最も困難な国際紛争でさえ解決する手段と選んだ、との認識です。英字紙の直訳調で回りくどいけれど、その通りに違いありません。その認識にも同感です。

けれども、私たちが評価する「核兵器のない世界を追求する」明言も、目標として宣言されたばかり。実行と結果が伴ってこそ本物だと言えます。したがって、理念と取り組みを重視した絶大な「期待感」と受けとめるのが、今の段階では精一杯の評価ではないでしょうか。

オバマさん自身の受賞後の発言も、「世界中の人々の勇気ある取り組みへの賞」と謙虚に述べ、「21世紀共通の課題に取り組むすべての国に行動を呼びかけたものとして受け入れる」と語りました。各紙に載った笑顔の写真からは、めずらしく照れくさい表情が見てとれました。受賞がオバマさんに重大な責任を課すことになったのは事実ですし、受賞の内容を実行するのも、実効を上げていくのも、まさにこれからの壮大な事業です。

参考までにいうと、近年「平和賞」を受けたアメリカ人は、2002年にカーター元大統領、07年にゴア元副大統領がいますが、現職大統領受賞は、英字紙にこう載っていました。

The choice made Obama the third sitting U.S. president to win the Nobel Peace Prize. - - オバマは3人目で、最初が26代目の(セオドア)・ルーズベルト(1906)2人目は28代目のウィルソン(1919)。90年ぶりの受賞で、前の2人はもはや歴史上の人物です。なぜ英字紙で紹介したかといえば、「sitting(座っている)」に「現職の」という意味があったからで、これもまた、参考までに。

前携(後述)と記した一部のコメントとは、新聞にはなかなか出ないキューバのカストロ前国家評議会議長の評価と分析の言葉。「ノーベル委員会の決定には必ずしも同意できないのだが、今回は有意義な一歩だと思う。過去の数々の米大統領が犯した大量虐殺政治への批判が込められている」。もう一人、イランのアハマディネジャド大統領は「(オバマ大統領が)世界の不正義を取り除くため、実際に歩み始めることを望む」と。それぞれ独特の表現をしながら、拒否も悪意も感じられない肯定的な反応といえましょう。

しかし、テロ戦争の渦中にあるアフガニスタンの民衆は、複雑な気持ちではないか。テロとの戦いは、2001年にニューヨークでアルカイダが引き起こした史上例を見ない、あの同時多発のテロ行為が発端でした。前任者だったブッシュが始めた戦争ですが、同じく「ブッシュの戦争」と批判され続けたイラク戦争は、オバマ時代に入るや、米軍を含む外国戦力の撤退で幕引きの段階にあります。ところが今もって米軍の増強が予定されるアフガニスタン。次回の「オバマのアメリカ」はその動きから始めようと思います。

(10月25日記。国際サブロー)